

DNA鑑定

高知県高知市 押岡芳一

半世紀の余を過ぎ、何時までも地獄のような沖繩の地上戦を忘れることが出来ない。怒濤のように押し寄せた米軍部隊を前に、本島最南端の摩文仁岳を中心に、守備軍は最後の激戦を展開していた。

昭和二十年六月下旬、首里を撤退した軍司令部が布陣する摩文仁岳に連なる巨岩地帯の一角で、自然洞窟を最後の軍無線通信所として、私達の小隊は離島並びに本土部隊との交信にあつてた。悪夢のようなその地上戦から五十六年、南部一帯を血潮に染めた戦いの

跡は、裸の巨岩帯を緑の自然に蘇らせていた。平成十三年一月、三十年この地域の遺骨収集に当たっている、出水市の高田俊秀氏の案内で、本会の塩川副理事長などの手助けをうけ、ジャングル状の蔓草や榕樹の根を切り開き、通信所跡の洞窟を訪ねることが出来た。

当時、摩文仁岳の攻防では、通信所周辺から海岸線一帯にかけて、住民を含め、従軍学徒や守備軍戦死者の遺体が累々と横たわっていた。

無二の戦友もこの地で戦死し、洞窟近くにその場所を確定することができた。

高田氏等により、すでに集骨された地区ということであったが、奇しくも遺体のあつた側に、遺骨の一部を発見したので、塩川氏の発起で、遺族とのDNA鑑定を依頼することにして、摩文仁の納骨堂におさめる遺骨の一部を、久留米大学にて鑑定することに。その後、精密検査の結果、残念ながら、遺族との不

符合が確立したことにより、平成十四年二月、遺骨は鑑定書と共に厚労省が保管する事になった。

「戦没者を慰霊し平和を守る会」では、沖繩はじめ大戦で各地に散華された戦没者のDNA鑑定が、活動の一つに取り上げられており、尊い戦没者の御霊が故郷の地に帰り、安らかな眠りにつかれるよう、この活動が実現を結ばれんことを祈念し、改めて平和の尊さを噛みしめるのである。(高知市新本町2-17-22)

戦没者に平和を誓う

福岡県久留米市 津留崎 恂

会員からのメッセージ

「戦没者を慰霊し平和を守る会」主宰の塩川氏とは職場を同じくした間柄で、当時沖繩で戦死された父親の遺骨捜しに幾度となく足を運ばれていたのを知っている。

あれから三十年、比国で散った叔父の遺骨捜しへと、その歩みは今なお続いている。この悲願は、帰りがかない父、夫、息子、兄弟を待つ全遺族に共通した切なる思いである。

過去の思まわしい誤った国策による朝鮮植民地化、満州事変を喫機とした満州実質支配、盧溝橋に端を発しての日中全面戦争、アジアからの白人支配駆逐を掲げての南方進出等々、全て「聖戦」

の名のもとであったが、これらは紛れもない「侵略行為」そのものであったことは明白である。私も軍務に服し、ソ連の宣戦に出遭い激戦を味わった。

数多い戦友の死を目の辺りにし遺髪を胸に密めての戦いだった。圧倒的な敗北を喫し、即捕虜となり、二年半厳寒の地に呻吟の生活を強いられた。環境の厳しさから、こ

こでも仲間の死に出遭い遺髪を携えての惨めな帰国だった。国の誤った道に導かれた場句の始末である。死ねば靖国に祭られる遺族には靖国に詣れば会えます。神様になられ

ました。どれ丈国民に犠牲を生もうと、重大な戦争責任はよくもかわされたものである。終戦から五十六年を経過して今なお一六万人余の遺骨が異境の戦跡等に放置の状態にある。

霊の無念さは如何ばかりだろうか、遺族の痛恨未だ和らぐ筈はない。図による収集の結果は極めて乏しく、実に対応は風化待ちに思える。

飽くまで遺族の元へ届ける責任を果すべきである。無法な戦さは、中国を主にアジア諸国に多大の損害を与え、人的にも二〇〇〇万人を超える死者を生み、物的破壊は甚大で、その苦痛、損失は計

会の発展を願う

三重県鈴鹿市 中西克己

拝啓
寒冷の候、ご健勝のこととお慶び申し上げます。「戦没者を慰霊し平和を守る会」の事務局に尽力されている塩川様には何時もながら感謝申し上げます。

また、又この度「平和の灯」発行の発足お祝い申し上げます。始めに、この会との出会いを申し上げますと転動先の佐賀において平成六年十二月一日付の西日本新聞に掲載されていた日比合同の慰霊碑設立の記事を見、発起人の永田勝美さんを知り直接お会いし、お話を聞かせて頂き、慰霊碑建立に賛同させ頂き現在の会との出会いとなりました。この会との出会いも九州に居たこそ、何かのご縁と感謝いたしております。私も昨年八月に大過なく定年を迎えることができました。父親の倍近く生かされていることに感謝し、これからは少しでも世の中の役に立ちたく思っています。

返って見ますと、生まれて八カ月で父親と別れ、父親に関する事は殆ど記憶がない、健在の母から聞かされているだけで、昭和二十年三月一日フィリッピン島のレイテ島にて戦死の知らせが強く印象に残っている。やはり戦後の厳しい環境下で三人の子供を育て上げた母親の苦勞は言葉では表せない、精神的にも体力的にも強心な、そんな生き様を身近に見、感受し、励みとし自分がかこまれて来た事に対して深く感謝した、母には何時何時までも健康で長生きして頂きたい。

皆さん、はじめまして。「戦没者を慰霊し平和を守る会」で事務局長を務めることになりました高木一希です。年齢は三十五歳で、母方の祖父が太平洋戦争で戦死して、五歳で、病院の事務職で労働組合の役員もしています。この度「平和の灯」発刊にあたり皆様から、当会の役員となったきっかけを紹介し、ご理解と今後のご協力をお願いしたいと思います。

私達は、厚生省の門を何事もなく通り過ぎたのですが、S社長の周りに見あたらないので何事かと思ひ、門の方に目をやると、社長は、ガードマンに止められてボディチェックを受けていました。私たちは、「さすが厚生省のガードマンは優秀だ」と感心しつつ、変なものが出てこなければいいのだがと心配していましたが、意外なことに、すぐに解放されました。七不思議です。幸先の良いスタートを切ったS社長は、一目散に担当部署に駆けつけ、持ち前の弁舌をふるい、交渉上手な一面を私たちに見せつけました。

要請が終わると、S社長は、「今回は挨拶代わりに、今後は挨拶代わりに」と思い、私に出来ることを少しずつやっていこうかと思っております。今後共よろしく願い申し上げます。

道、私が「僕のじいちゃんも戦死した」と口を滑らしたことを、さすがS社長は見逃しません。後日、しっかりと「戦没者を慰霊し平和を守る会」を立ち上げ、私をメンバーに引き取り込み、何と現在は事務局長にまで就任していただいています。隙を見せたいわけではありません。ひやかし半分で行動したことが倍返して返ってきます。

戦没者の孫として参加

福岡県久留米市 高木一希

私の履歴書

福岡県北九州市 土手本 武義

大正十二年十一月十七日私は熊本県天草郡高戸村という田舎に生まれました。現在は竜ヶ岳町となつています。昭和十年春住みなれた故郷をはなれ、福岡県遠賀郡水巻村に移住しました。現在は水巻町となっております。昭和十三年頃末小学校高等科二年を卒業。四月には日産化学工業株式会社の査査課というところに、測量助手見習として入社しました。入社時にいろいろと訓示があり、日給五十五銭の辞令をうやうやしくいただきました。

今日からはいよいよ私も社会人の一年生という自覚と責任を、痛感しました。しかし私は一年すぎた。昭和十八年四月、佐世保第二海兵団に入団各地を転戦する。昭和二十年八月十五日終戦、昭和二十一年六月二十五日名古屋に上陸する。昭和二十二年八月八日、再び元いた炭鉱で働くことになった。その炭鉱で働くことになった。昭和十六年一月には、私は福岡県遠賀郡の高松炭鉱第一鉱業所測量係に転勤となった。職場も軍隊から帰った上司がいて、軍隊調でやっていた。明けて昭和十七年になると、連戦連勝の我が日本軍もミッドウエーでつまづき、敗戦への道をたどるのでした。このような時期に海軍に志願した

昭和十九年十一月十四日このころの世相を知る人は少なくなつた。この日、私たち兄弟四人は母に連れられて、呉軍港近くの公園で父と面会した。

尾張瀬戸から呉までの長旅に疲れ切った私達の前に、つい七月に入隊した父が海軍水兵になって立った。「面会」というレモニーだった。「よく来た

てくれた。子供を連れて大変だったな」。交わす言葉は少なかつた。どこをどう乗り継いだのか。列車の通路で肩を寄せ合ひ、夜ともなれば新聞紙の上で泥のように眠りこけた。思い出してもぞつとすると厳しい旅だった。私が十二歳。兄妹四人のうち末妹が三歳。母が三十四歳の晩秋の旅だった。

昭和二十二年五月三十一日疎開先。学校から帰ると、家の前の畑で母が目を泣きはらしていた。すぐ事情は飲み込めた。復員局からの戦死の公報だった。昭和二十二年七月十八日父帰る。白木の箱に一片の紙、涙あふれる。平成十年九月二十一日比島クラークの平原からピナツボの山なみに向

戦いの抄史

愛知県新城市 安藤 陽二

昭和十九年十一月十四日このころの世相を知る人は少なくなつた。この日、私たち兄弟四人は母に連れられて、呉軍港近くの公園で父と面会した。

尾張瀬戸から呉までの長旅に疲れ切った私達の前に、つい七月に入隊した父が海軍水兵になって立った。「面会」というレモニーだった。「よく来た

てくれた。子供を連れて大変だったな」。交わす言葉は少なかつた。どこをどう乗り継いだのか。列車の通路で肩を寄せ合ひ、夜ともなれば新聞紙の上で泥のように眠りこけた。思い出してもぞつとすると厳しい旅だった。私が十二歳。兄妹四人のうち末妹が三歳。母が三十四歳の晩秋の旅だった。